



Title	自然会話コーパスに見られる「って」の用法と機能及びその音調について
Author(s)	Risma, Rismelati
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/101744">https://hdl.handle.net/11094/101744</a>
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 論文内容の要旨

氏 名 ( リ ス マ リ ス ム ラ テ ィ )	
論文題名	自然会話コーパスに見られる「って」の用法と機能及びその音調について
<p>論文内容の要旨</p> <p>日本語の自然会話において、多くの終助詞や文末表現が存在し、それらは話し手の意図や感情、そして聞き手への思いを表現する役割を果たしている。その中で引用助詞「と」の省略形として頻繁に用いられる「って」がある。本論文は、文末に現れるその特有の表現としての「って」を対象に、「って」が持つ意味用法について考察しつつ、「って」の各用法に伴う音調と自然会話での実用について取り上げたものである。従来、文末表現「って」の意味用法に関して総合的な分析はされてきたが、それらが持つ具体的な音調のパターンと意味的用法との関係性については、十分な分析が行われていない。本論文は、自然会話に用いられる文末表現「って」の意味的用法と機能の分類から、それぞれの用法が持つ音調の特徴や自然会話での使用傾向を中心とした分析である。</p> <p>本論文は7章で構成されており、第1章では具体的な例で、文末表現「って」と音調との関係性を示しながら、本論文のねらいと考察の対象とする表現の範囲について述べている。</p> <p>第2章では、これまでの「って」に関する先行研究をまとめ、理論的な背景と本論文の立場について述べ、文末表現「って」の基本用法は大きく分け、4つの用法に分類されることを指摘した。それは引用用法、伝聞用法、感情表出と命令である。さらに、「って」が文末に現れる際の音調の違いがもたらす意味の変化や日本語の日常会話コーパスを用いて、自然会話における「って」の会話場面ごとの使用傾向の分析という問題点について取り上げた。</p> <p>第3章では、本論文で扱う文末の定義と問題にする研究対象を指定する。また、調査で扱われるデータ資料やデータの収集方法について述べる。文末表現「って」を対象データとして取り扱い、日本語日常会話コーパスのデータを調査資料とする。そして、文末表現「って」の用法を明確にすると同時に、会話場面や話者間の背景などを検討する必要があるため、まず、コーパス・データから、都道府県単位で収録された会話データに限定した。今回取り扱う会話場面というのは、家族関係、友人関係、同僚関係、仕事関係、サービス場面の5つの親密関係を表す会話場面である。また、コーパスから抽出された「って」の事例の音調を分析するため、音声分析ソフトウェア「Praat」を使用し、「って」のピッチやポーズなどを測定した。</p> <p>第4章では、指摘した文末表現「って」の4つの分類を参考にしながら、「って」の下位分類の意味や機能に関する考察を述べていく。最初に、引用としての文末表現「って」の基本的な機能は、引用助詞の「と」が担う機能と同じ働きを持ち、他者や話し手自身の発言や思考を簡潔に伝達する手段として用いられる。この観点により、引用の「って」は、発言引用と思考引用という下位分類に分けることにした。発言引用の「って」は、具体的に聞き手や第三者、話し手自身の発話など、誰の発話かに着目する引用形式を指す。例えば、「パパが迎えに行くって」という発話では、話し手が、第三者であるパパの発言を引用し、相手に伝えている。それに対し、思考引用の「って」は、話し手自身の考えや意図を他者に伝える役割を果たす。例えば、「父ちゃん会いたいかなって」という発話では、話し手が思っている個人的な感想や評価も示しながら、相手からの反応も期待している。</p> <p>次に、伝聞の「って」は、形式により、伝聞の「って」、伝聞の「んだって」と伝聞の「ですって」という下位分類に分けた。伝聞の「って」は、さらに、下位用法にそって、情報伝達、情報確認、情報提示に分類した。また、伝聞の「んだって」には、3つ用法があり、事情説明、驚き・意外と疑問を表している。最後に、伝聞の「ですって」には、からかいを表すために用いられる傾向も見られる。</p> <p>つづいて、感情表出の「って」は、話し手の感情を表現するために用いられるという観点により、「念押し」と「反発」に分類した。最後に、命令の「って」は、話し手が聞き手に何らかの行動を促す際に用いられるという観点で、強めの命令と独り言的な命令に分けた。命令の意味合いに伴いながら、「って」を用いることによって、話し手の要求や願望が強調されており、聞き手に直接的な働きかけを行う意図が明確である。</p>	

第5章においては、文末表現「って」が表す意味用法の分類による音調の特徴について分析する。まず、引用の「って」の発言引用は、下降調「って」が最も多く、その次に上昇調の「って」が見られた。それに比べ、思考引用は、より豊富な結果が見られ、下降調が最も多く、上昇調、平坦調と複合音調の「って」が見られた。さらに、思考引用の場合は、「って」に先行する終助詞により、終助詞「な」で先行する「なって」形式と、終助詞「かな」で先行する「かなって」パターンという下位分類も確認できた。さらに、思考引用の意味用法に伴う音調との関係性を通し、話し手の意図が見られた。音声データを分析する際、ポーズ（引用の終了部分から「って」までの間）の長さによって確認できた。具体的にいうと、下降調のポーズが長い場合、話し手の「疑問」「詠嘆」「意志」を表す一方で、ポーズが短い場合は、「納得」「判断」「推測」を表す傾向が見られる。そして、上昇調「って」は、ポーズが長い場合、「回想」「詠嘆」「提案」「願望」を表し、ポーズが短い場合は、「疑問」「納得」「判断」を表すことが分かった。さらに、平坦調の「って」は、ポーズが長い場合、話し手の「詠嘆」と「疑問」を表すことにに対し、ポーズが短い場合はより多く現れ、「詠嘆」「納得」と「判断」を表すことが分かった。また、複合音調の「って」に関しては、引用部分の文末が下がり、その後にくる「って」が上がったということを確認したところ、ポーズが短く、話し手の「疑問」を表す結果となった。

次に、伝聞の「って」には、下位用法、「情報伝達」、「情報確認」、「情報提示」という下位用法がある。まず、「情報伝達」の「って」と「情報確認」としての「って」には、上昇調の事例が最も多く見られた。それに対し、「情報提示」の「って」には、下降調の事例が主に確認できた。そして、「んだって」の事情説明の音調の場合、下降調が多く見られる。それに対し、「んだって」の驚き・意外と「んだって」の疑問の場合は、両方とも上昇調が最も多いということが分かった。最後に、伝聞の「ですって」は、からかいを表す傾向があり、平坦調と上昇調である。

つづいて、感情表出の「って」は、「念押し」と「反発」の分類があり、両方の音調に関して、どちらも上昇調が多く見られる。最後に、命令の「って」は、強めの命令の場合、上昇調が多く、独り言的な命令の場合、上昇調と下降調が確認できた。

第6章では、第4章と第5章で文末表現「って」の意味用法と機能の分類とそれらに伴う音調によって得られた結果を踏まえながら、日常会話コーパスに用いられる「って」の使用傾向と使用率について詳細に述べる。文末表現「って」の使用傾向については、関係別会話による家族関係、友人関係、同僚関係、仕事関係、サービス場面という5つの会話場面によって、大きく異なる傾向が見られた。結果として、各会話場面カテゴリーの関係性の親密度やフォーマリティの違いを反映している。家族関係と友人関係の会話では、よりカジュアルかつ感情豊かな使用が目立ち、親密さや自然なコミュニケーションを支えている。同僚関係と仕事関係の会話では、主に効率的かつ明確な情報伝達的手段として使われるが、適度な柔らかさも保たれている。さらに、サービス場面では、フォーマルさと親しみやすさが共存し、「って」が柔軟に機能することで、自然な対話が促進されている。以上のことから、「って」は多機能な表現として、状況や関係性に応じて柔軟に使い分けられ、日常会話における効果的で自然なコミュニケーションを支えていることが明らかになった。

最後の第7章では、本論文の全体、特に重要な点をまとめて記述し、本論文で残されている課題と発展性について述べていく。これらの分析により、「って」は単なる文法的な要素だけでなく、音調との関係、日本語の自然会話において、重要なコミュニケーション・ツールであることが示された。

本論文は、文末表現「って」の意味・機能とその音調の特徴を明確にし、会話の中での役割を体系的に解明した。これにより、「って」は文末表現としての役割を超え、話し手の意図や感情を柔軟に伝える重要なコミュニケーション・ツールであることが示された。今後も「って」の研究は、より広い言語学的視点や日本語教育的応用を含めて発展していく意義がある。本論文では、従来の視点を超え、家族関係、友人関係、同僚関係、仕事関係、サービス場面といった異なる会話カテゴリーを比較対象とすることで、文末表現「って」の多機能性をより深く理解することを目指した。また、音調分析を加えることで、話し手が「って」を用いて聞き手にどのような意図や感情を伝えようとしているのか具体的に示した。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( RISMA RISMELATI )		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教 授 岩井 康雄
	副 査	教 授 筒井 佐代
	副 査	教 授 原 真由子
	副 査	教 授 荘司 育子
	副 査	准教授 高井 美穂

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、会話で見られる引用標識「って」について、特に文末で用いられる場合に関して、自然会話コーパスを用いて実証的に分析し、その音調についても分析を進め、その実態を捉えることを目的としている。

第1章「序章」では、対象となる文末形式「って」の事例を示し、それがカジュアルな場面で頻繁に用いられることから、日常会話を対象とする研究の必要性を述べ、会話参加者間の関係や用いられる音調まで分析の対象とするため、『日本語日常会話コーパス (CEJC, 2022)』のデータを分析対象とするとされている。

第2章「先行研究の概観」では、「って」の全般的な意味用法、文末の「って」の機能、関連表現「(ん)だって」について、先行研究を取り上げ、その機能面からの分類をまとめている。これまでの研究では、様々な「って」が取り上げられ、その意味用法に基づいて機能が分類されているが、本論文の立場では、それらは「って」の使用実態を捉え切れていないとされる。さらに「って」の音調については、これまでの研究でも言及されることはあっても、実際の音調を分析するところまでは、わずかな例外を除けば、踏み込んでいないことが指摘される。その他、語用論的立場からの分析についても触れられるが、対象とするデータの偏りや「って」の機能全体を視野に入れていない点など不十分な点が指摘される。これらを踏まえて、コーパスを用いた文脈・場面ごとの使用実態を詳細に分析する必要性が述べられ、そこで用いられる「って」の音調と機能の関係についても分析が必要であるとされている。

第3章では、対象とするデータや音調の分類基準が示されている。

続く第4章では、コーパス中の297件の会話から1667例の「って」を抽出し、分析を進めている。

まず初めに「引用」の「って」が分析される。「引用」の下位分類として「発言引用」と「思考引用」が分けられる。前者では発言者が誰であるのか（第三者、聞き手、話し手自身）という観点を考慮しながら、事例に基づいて分析が進められる。後者では形式的特徴が見られ、「な」＋「って」、「かな」＋「って」、「だろう」＋「って」、「だ」＋「って」、意向形＋「って」の5パターンが抽出されている。そのうち、前2者が多数を占め、後は極少数であることが示されている（以下、前2者を対象として分析が進む）。「なって」形式の用法としては、（多い順に）詠嘆、納得、判断、回想、確認、願望、やわらげなどが分類でき、そのそれぞれについて事例を挙げて説明している。「かなって」形式では、疑い・疑問、判断、納得、推測、提案、願望、意志といった用法が示され、やはり事例を挙げて説明される。「なって」、「かなって」とともに話し手の感情や考えを間接的に表現しているものとまとめられる。

次に「伝聞」の「って」が分析対象となる。1) 情報伝達、情報確認、情報提示を表す「って」「だって」、2) 事情説明、驚き・意外、疑問を表す「んだって」「んですって」、3) ダイクシス表現としての「ですって」の3分類が示され、事例に基づいて分析が示されている。

第3の「って」の機能として「感情表出」が取り上げられ、「念押し」と「反発」という二つの用法に分類されることが、事例に基づいて確認された。

最後に「命令」の「って」について、「強めの命令」と「独り言的な命令」の実例を示している。

以上の通り、第4章では、文末の「って」の基本的な4つの機能分類が事例と共に示されている。いずれの機能についても、コーパス・データから話者間の関係性（家族関係、友人関係、同僚関係、仕事関係、サービス場面）ごとに「って」の例が拾われ、発話数も示されていることで、それぞれの機能の使用頻度についても考察されている。

第5章では、文末の「って」の機能と音調との関係が分析されている。第4章で示された4つの大分類およびそれ

ぞれの下位分類について、コーパス・データから事例を抽出し、ピッチとポーズの長さを測定している。

「引用」の音調としては、「発言引用」では主に断定的引用では下降調、確認的引用では上昇調が現れることが確認された。「思考引用」における音調は多様で、下降、上昇、平坦および複合音調が確認された。この「思考引用」では、前接する語句と「って」との間のポーズの持続時間とピッチの組み合わせが、意味の違いを決定する大きな要因の一つになっていることが示されている。例えば、下降調で長いポーズを伴う場合、「疑問」「詠嘆」「意志」を表す一方、ポーズが短い場合は「納得」「判断」「推測」を表す傾向が見られた。

「伝聞」「感情表出」「命令」のそれぞれの音調についても、どのような音調が多い傾向があるかが示されており、全体として、音調の多様性を確認する結果となっている。

第6章は話者間の関係性（家族関係、友人関係、同僚関係、仕事関係、サービス場面）ごとの「って」の使用傾向と使用率を分析している。話者間の関係性によって、「って」の機能別使用率は異なっており、それは親密度とフォーマリティによると分析されている。

第7章はまとめの章で、全体のまとめと本研究の意義、今後の課題と発展について述べられている。

本論文は、文末の「って」について、その用法の実態を、コーパスを用いて明らかにすることを目的としており、1600例を超える「って」発話を抽出し、分析を示したこと自体が一定の達成といえるものである。これまでも指摘されている「って」の多機能性について、事例に基づき、その使用頻度も併せて分析し、結果を示している点は、文末表現「って」の機能的側面を捉えるだけでなく、実際にどのように使われているかを改めて明示した研究として評価できるものである。また、一部の研究を除き、これまで主観的、断片的に言及されるにとどまっていた音調について、音響分析を行い、一定の量的分析を示したことは、「って」の機能を考える上でもやはり評価できる点である。終助詞「ね」などの文末表現の機能を考えるとき、その音調分析が不可欠であるのと同様、本論文の文末表現「って」においても、その使用実態を知るために音調は欠かすことのできない重要な特徴である。これまでの研究が「って」の機能を分析するとき、音調面の分析については、研究者の内省のみに頼っているもの、ごく少数の発話を観察したものや、必ずしも「自然」とは言えない状況での発話を対象としたものなど、問題を持っていたことを考えると、コーパスで見られる多くの日常会話事例を分析したことは、この論文のパイオニア的性格に繋がるものと評価できる。

一方で、既存の機能分類に実例を当てはめただけで、新たな提案など明確には示せていないと見える点や、音響分析を目的としないデータ（ノイズや音声のボリュームなどの点で、音響分析ができないものが含まれる）を対象にしたこと、音調の効果を知る上で必要な対照データを見つけられなかったことなど、方法面についても、不十分な点があることも指摘せざるを得ない。しかしながら、本論文における考察は、その量的側面と音調をも考えるという質的側面とを併せ持つ研究成果として、今後の日本語教育において文末表現「って」を取り上げるといった応用面を考えるとき、その基礎的情報として参照されるに足る十分な基盤となっているものといえる。

以上により、本審査委員会は、本論文が博士（日本語・日本文化）を授与するに値する優れた研究であると判断し、全員一致で合格と判定した。